エピローグ

一九八八年のはじめ、ぼくはこれといった理由もなく、ソロモン・ブラザーズを辞めた。この会社はあぶない、と思ったわけではない。ウォール街が崩壊する、と予感したわけでもない。幻滅の気持ちが大きくなりすぎて、耐えられなくなったわけでもない（幻滅はある程度まで大きくなったが、がまんできる段階にとどまっていた）。持ち場を離れるもっともらしい理由はいくらでもあるが、そんな理由を並べるより、これ以上いる必要がないから去ったと言ってしまったほうが、実情に近いだろう。

父の世代の人間は、いくつかの信念を持って育ってきた。そのうちのひとつは、ある人物の稼ぐカネの額は、社会の福祉や繁栄に対するその人間の貢献度を測るおおよその物差しになる、というものだ。ぼくは、かなり父親にべったりと寄り添って育った。毎晩、野球で汗まみれに

なった体を、父親の近くの椅子にちょこんと載せ、何と何が真実で、何と何がそうではないという話に耳を傾けた。大金を稼ぐ人間は人格的にもすぐれているという話は、ほとんどいつも真実として語られた。独立心と勤勉が、成功の必須条件というわけだ。父のこの信念がはじめて揺らいだのは、勤めて二年にしかならない二十七歳の息子が二十二万五千ドル稼いできたのを見たときだった。最近になってようやく、父はそのショックから立ち直った。

ぼくはまだ、立ち直っていない。非常識きわまりないマネー・ゲームの中心地にいて、自分の社会的な値打ちとかけ離れた待遇を受け（自分にはそれだけの値打ちがあるのだと、いくら思い込もうとしても無理だった）、まわりを見ると、同じくらい半端な何百人という連中が、札束を数えるひまもなくポケットにしまい込んでいる。そんな状況にほうり込まれて、信念を保っていられるだろうか？　まあ、人によりけりだろう。ある種の人間にとっては、財布の厚みは信念をますます強めるものでしかない。彼らは、あぶく銭をちゃんとした報酬と見なし、自分がりっぱな市民であることの証拠だと胸を張る。そういう考えの持ち主は、いつかその思い上がりの報いを受けるものだ、とついつい信じたくなるが、現実はそうではない。彼らはどんどん金持ちになり、たいていの場合、ぬくぬくと肥え太ったまま死んでいくのだ。

しかし、ぼくに関しては、信念がくずれていくばかりだった。稼げば稼ぐほどいい生活ができるという建て前は、それを打ち消すような実例のあまりの多さに押しつぶされた。その建て前をなくしてしまうと、懸命に稼ぐ意味もなくなる。おもしろいのは、そういう信念がどれほ

ど深く自分の心に刻み込まれていたか、信念が消えかけるまでほとんど気づかなかったことだ。

小さなかけらほどの教訓だが、それでも、ソロモン・ブラザーズで得た知識のうちでは最も有用なものだった。ほかの知識は、ほとんど全部、会社に残してきた。数億ドルのカネを平気で右から左へ動かせるようになっていたのに、数千ドルを何に使うか決める段になると、いまだにうろたえてしまう。研修プログラムでは、謙虚さというものを一時的に身につけたが、用がなくなったとたんに忘れてしまった。それから、組織が人間を堕落させがちだということも学んだが、その後も好んで組織に加わり、好んで堕落させられてきたぼくが、その教訓を生かせたかどうかとなると、かなりあやしい。ひっくるめて言えば、実生活に役立つようなことはあまり学ばなかった。

もしかすると、一番おいしい知識はまだ先のほうにあって、ぼくは辞めるのが早すぎたのかもしれない。しかし、ソロモンに居残るべきだという気持ちは薄れ、その一方で、ソロモンを離れるべきだという気持ちが日増しに強まっていった。ぼくの仕事は、毎朝出社して、前にもやったようなことをやり、前とたいして変わらない報酬を受け取るというだけのものになっていた。冒険のない生活に、ぼくはいやけがさしてきた。リスクを求めて、ソロモンのトレーディング・フロアを去ったと言ってもいいだろう。経済的なことを考えると、まったくばかな賭(か)けだ。市場では、よほど大きな見返りがないかぎり、リスクは冒さない。求職市場でも、それはごく基本的なルールであり、ぼくはそのルールを破ったわけだ。トレーディング・フロアに

居残った場合にくらべて、今のぼくは、ふところがさびしいうえに、大きなリスクにさらされている。

そう、はたから見ると、ぼくの退社の決断は、ほとんど自殺的な行為で、たとえて言うなら、投資家がソロモンの下等動物セールスマンの手に全財産をゆだねるようなものだった。大富豪になれる確率の一番高い道を、ぼくは自分から踏みはずしたのだ。ソロモンが難局にぶつかっていたのは確かだが、それでも、腕のいい仲介人にはいくらでもぼろ儲けのチャンスはあった。それに、ソロモンがもし難局を切り抜けたら、カネはもっと楽に流れ込んでくる。実を言うと、ぼくは今でも、ソロモン・ブラザーズの株を持っている。業績がいつか持ち直すと信じているからだ。この会社の底力は、ジョン・メリウェザーのような人物の天性の直感にある。うそつきポーカーの世界チャンピオン、メリウェザーをはじめとして、そういう直感を持つ何人かの社員が、まだソロモンで債券を取引しているのだ。いずれにしても、ソロモンの業績がこれ以上悪化することは考えられない。船長がいくら船を沈めようとがんばっても、船はしぶとく浮いているものだ。会社を去るとき、ぼくは、高値で買って底値で手放すという初心者並みのミスを、自分が犯している気がした。まあ、そのミスで生じる損失のほんの一部だけは、会社の株を買ったことで相殺できるだろうが。

ぼくが損な取引をしたとすれば、その原因は、まったく取引をしなかったことにある。しかし、辞めようと決心したあとで、自分は結局、そんなに愚かなことをしようとしているわけで

もないのだ、と思い直すだけの時間があった。別れの食事をしたときに、アレキサンダーは、これがすばらしい転機であることを、ぼくに納得させようとして、こう言った。自分はこれまでいくつもの決断を下してきたが、最良の決断と呼べるものはみんな、そのときには意外で常識はずれに見えた。世の中の流れに逆らおうとして下した決断は、必ずいい結果を生むものだ、と。安全第一の進路選択が尊ばれる時代だけに、予測のつかない生きかたを支持するこの意見は、ぼくの耳にはすがすがしく響いた。彼の言うとおりだとしたら、こんなにありがたいことはない。

訳者あとがき

というわけで、八〇年代のアメリカ金融界は、巨額のカネに引き寄せられたエリートや策士やギャンブラーたちが、はなはだしく火花を散らして闘う戦場であり、巻頭でフレデリック・シュウェッド・ジュニアが言っているように「巨大な幼稚園」であり、過激、非常識、無節操が売りものの悪場所であり、つまり、ものを書く人間にとっては、まさに宝の山だった。さまざまな書き手が、さまざまな切り口で、このハチャメチャな世界のことを活字にした。なんと、007シリーズの脚本家として名高いあのクリストファー・ウッドまでが、『マネー・ビジネス』（朝日新聞社）という本を出した。いや、うそ、うそ。よく読んでみると、同姓同名の別人だった。

玉も石も混じり合う何十冊もの書籍の中で、最も広範囲な読者の支持を得たのは、フィクションでは、トム・ウルフ（こちらはまちがいなく、『ザ・ライト・スタッフ』を書いたあのトム・ウルフだ）の初の小説『虚栄の篝火』（文藝春秋）、ノンフィクションでは、断然、この『ライアーズ・ポーカー』だろう。

なにしろ、作者がただものではない。債券取引の最大手ソロモン・ブラザーズの元セールスマン、しかも、入社三年めで凄腕野郎と呼ばれ、二十七歳にして二十二万五千ドルの年俸を稼

ぎながら、さっさと辞めて、もの書きに転向してしまった人物だ。アメリカ南部のルイジアナ州で生まれ育ち、プリンストン大学では美術史を専攻したという、投資銀行員としては異色の経歴の持ち主で、だからこそ札束の重みに押しつぶされず、ウォール街というジャングルの中で、バランス感覚を失わずにいられたのかもしれない。文章のすみずみにまで、柔軟な才気がみなぎっている。

本書の内容については、くどくどと解説する必要はないだろう。金融界の激動を、外から眺めたのでも、もぐり込んで取材したのでもなく、まさにその渦中にいて、さめた目で観察したドキュメントだ。明るく、楽しく、わかりやすい。翻訳するにあたって、何冊かの参考書を買い込んだが、あまり役に立たなかった。参考書を読んで湧いてきた疑問に、この本が答えてくれることのほうが、むしろ多かった。げらげら笑いながら読んでいくうちに、八〇年代の金融革命史が立体的に頭に入るという、まことにありがたい本である。これもマイケル・ルイスの筆力だろう。ただ、ソロモン・ブラザーズの歩み、特に社名の変化について、本文中ではくわしく説明されていないので、整理する意味で、時間軸に沿って、簡単な沿革を書いておこう。

ソロモン・ブラザーズは、一九一〇年、ソロモン三兄弟によって資本金五千ドルで設立され、攻撃的にリスクを引き受ける債券ブローカーとして、独自の地位を築いていった。創業者の血を引くウィリアム・ソロモンが七八年に会長の座を退き、ジョン・グッドフレンドに実権を譲ったころから、急速に事業の幅が広がり、収益も増大した。八一年、前会長の意向を裏切る形

で、商品取引業者ファイブロ（フィリップス・ブラザーズ）に吸収され、合資会社からファイブロ・ソロモンという名の株式会社となる。グッドフレンドは会長の椅子を四千万ドルで売り渡したうえで、新会社の債券取引部門の長に納まった。ところが、八二年以降の債券市場の急成長で、ファイブロとソロモンの力関係が逆転し、八四年に、グッドフレンドは会長に返り咲く。八六年には、社名をソロモン・インクとし、完全に母屋を乗っ取った。われらがルイス君は、八五年に入社し、八八年初頭に退職している。

ついでに、本書刊行後のウォール街の動きを少しばかり。

第十章の主役であるジャンク・ボンドの帝王、マイケル・ミルケンは、証券詐欺、脱税などの容疑で起訴され、法廷で泣きながら罪を認めて、六億ドル（あほらしくて換算する気にもなれない）の罰金を言い渡された。また、第一章のヒーロー、大物トレーダーのジョン・メリウェザーは、その後、ロングターム・キャピタル・マネジメントという会社を興し、一九九八年、金融界を揺るがす大事件に中心人物として関与することになる。その経緯は、『最強ヘッジファンドＬＴＣＭの興亡』（日経ビジネス人文庫）に詳しい。